



特集

『平家物語』を楽しむ

古典教材の定番ともいえる『平家物語』。平成二十三年度より、子どもたちは小学校五年でも『平家物語』を学ぶようになりました。小・中の連携をどう考えればよいのか、中学校で魅力的な授業を展開するためにはどうすればよいのか。現場の先生方の対談を中心に探っていきたいと思います。

撮影：鈴木俊介



『平家物語』はおもしろい！

お茶の水女子大学附属中学校教諭

宗我部義則

中学校の現場でさまざまな実践をされている宗我部先生と、今春『古典が好きになる』（光村図書）を上梓し、小学校で楽しい古典の授業をされている青山先生に対談をしていただきました。『平家物語』を使って小・中でのような授業が考えられるか、『平家物語』の教材としての魅力は何かなど、熱く語り合っていました。

筑波大学附属小学校教諭

青山由紀

や、「祇園精舎」「沙羅双樹」等の難しい言葉は写真などの資料を使いながら説明します。また、デジタル教科書に収録されている琵琶奏者による語りの動画も見せるようにしています。子どもたちが語りをまねて、教室が盛り上がるんですよ。「ぎい〜お〜んしよお〜んじや〜のお〜」って（笑）。

「語り」のよさ

宗我部 小学校では『平家物語』をどのように教えているのでしょうか。

青山 やはり『平家物語』との初めての出会いを楽しみたいものだと思います。声に出して読ませ、独特の調子やリズムを体で感じさせるようにしています。小学校の教科書には『平家物語』の冒頭部分に掲載されているので、作品の歴史的背景



▲琵琶奏者による語りの動画。中学校「国語デジタル教科書」に収録されている。



言葉のリズムに

躍動感があり、

音読すると気持ちがいい。

(宗我部)



そが べよしのり
宗我部義則

埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題（中学校国語）」作成および分析委員。平成20年告示「中学校学習指導要領解説国語編」作成協力者。編著書に「群読の発表指導・細案」（明治図書出版）など。光村図書 小学校「国語」教科書編集委員を務める。

宗我部 目に浮かぶようです（笑）。
青山 琵琶の音色に合わせて語る、ということが、子どもたちにはイメージしにくいので、音声を聞かせることはとても大事だと思っています。最初は勢いよく早口で音読していた子どもたちが、動画を視聴した後は、一つずつ音を伸ばしながら力強く語るようになります。

宗我部 中学生に冒頭部分の音声を聞かせると、「先生、この調子ですつと続いていくんですか」と質問してくる生徒がいるんです。ですから、「本編に入ると、もつと速くなったり、語るような調子になったりするよ」と話し、他の部分の音声も聞かせるようにしています。教科書にはいろいろな古典が取り上げられていますが、『平家物語』ほど、言葉のリズムに躍動感があるものはないと思います。生徒たちに音読さ

せると役者がかかってくるんですよ。時代劇のような語り口で読みながら、自分にほれほれしているのがわかります（笑）。
青山 声に出して読むと、いい気持ちになれるのは『平家物語』の魅力ですよ。それはやはり「語り」の強さなのかなと思います。

群読のおもしろさ

宗我部 「扇の的」で群読をさせると、最初は尻込みしていた生徒が、練習が進むとだんだん乗り気になってくるんです。自ら「与」役をやらせてくれ」と言ってきたり。
青山 それは小学生も同じですね。最初は嫌がっていたのに、実はひそかに与一のせりふを練習していたりする（笑）。小学校の教科書には『平家物語』の冒頭部分の

みが掲載されているのですが、私は戦いの場面にも触れさせたいので、なるべく時間をとって「扇の的」も取り上げるようにしています。ただ、小学生に群読をさせるのは難しいので「役割読み」にしています。配役を決めて、みんなで声を出す楽しさを味わわせるんです。役割読みをすると、情景を頭に浮かべることができるようですね。自然と子どもたちが乗ってくるので、楽しい授業になります。

宗我部 中学生になるともう少し踏み込んで、登場人物の心情を読み取って、それを声でどう表現すればよいかというところまで考えさせます（宗我部先生の群読の実践はP10-11を参照）。配役を決めた後、「どんなふうに関心があるのか」「このとき与一はどんな気持ちだったんだろうか」ということを生徒たちに話し合われます。

例えば、与一が目を閉じて「南無八幡大菩薩……」と祈念する場面。この長いせりふをどう読めばよいか話し合えたところ、「与一は本当に声に出して言ったのかな」と発言した生徒がいました。私がすかさず、「心の中の声なのだとしたら、どんな読み方をすればいいんだろう」と投げかけると、生徒たちからいろいろな意見が出されて授業がとても盛り上がりました。『あの扇の真ん中射させてたばせたまへ』にいちばん思いが込もっているのを、ここを強く読んだほうがいい」「与一の覚悟が感じられる」「弓切り折り自害して」を強く読んだほうがいい」「いや、この矢はつぎせたまふな」など、さまざまな意見が出されました。
青山 なるほど、おもしろいですね。心情に迫るとするのは、中学生だからできることだと思います。小学生だと、与一はあく

までお話の中の登場人物。自分と重ねて心情を考えるとところまでは至りません。よく、「小学校で『扇の的』を扱われたら、中学校で教えることがなくなってしまうよ」なんて言われるのですが、あまり気にしないでよいのかもしれない。小学校のときに情景を思い浮かべながら役割読みした「扇の的」を、中学校では心情を考えながら登場人物に成りきって群読する。そうやって、学び深めていくおもしろさが味わえるはずです。

宗我部 発達段階に応じて子どもたちができることを引き出そうとすれば、おのずと授業内容は変わってくるはずですよ。どんどん重ねて教えていけばよいのではと思

宗我部 発達段階では、「扇を射る」というドラマチックな場面が終わりにしてもよいのかもしれない。でも中学校では、その先も考えさせたい。なぜ与一は男を射

声に出して読むとき、

「語り」ならではの

強さがある。

(青山)



あおやま ゆき
青山由紀

東京都生まれ。筑波大学大学院修士課程修了。私立聖心女子学院初等科を経て、平成10年より現職。日本国語教育学会常任理事、全国国語授業研究会常任理事。著書に「古典が好きになる」（光村図書）、「板書 きれいで読みやすい字を書くコツ」（ナツメ社）、「樋口咲子共著」などがある。光村図書 小学校「国語」教科書編集委員を務める。

「同化(共感)」と「異化」

宗我部 「扇の的」では、与一が扇を射るまでに逡巡する場面と、最後に舞いを披露した男をあっさり射落とす場面が対照的に描かれています。与一は扇を射るときはあんなに迷っていたのに、男を射るときは何の迷いもない。中学生は、そこにおもしろさを感じるようです。

青山 そうなんですか。小学生だと、与一が男を射落とす場面を読むとシユンとしてしまうんです。だから、「扇の的」を教えるときは、扇を射るところまでしか取り上げないこともあります。

宗我部 小学校段階では、「扇を射る」というドラマチックな場面が終わりにしてもよいのかもしれない。でも中学校では、その先も考えさせたい。なぜ与一は男を射



「同化する体験」と「異化する体験」、 その両方を味わわせたい。

(宗我部)

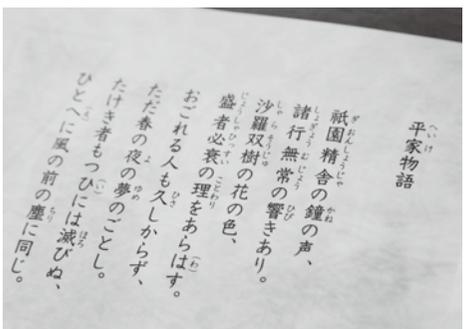
私たちは与一に共感し、同化して読むでしょう。しかし、平然と男を射落とす場面では、自分たちとはまったく違う「武士」なのだ、異化して読む。そうやって今の自分と比べて、同化したり異化したりしながら、その作品を味わうことが、古典を学ぶおもしろさだと思います。

大事にしたいこと

青山 小学生だと、今の自分と比べて読むのは難しいので、古典が「今の時代にも通じるなあ」と感じさせたいと思っています。そのために、私は『平家物語』の冒頭部分^{はつらつ}を学習させる前に、「荒城の月」と出会わせるようにしています。

宗我部 「春高樓の花の宴……」で始まる唱歌ですね。

青山 ええ。明治期に作られた「荒城の月」



▲小学校では、5年の教科書に「平家物語」の冒頭部分が掲載されている。

落とすのに迷いがなかったのか、私は生徒たちに話し合わせました。そして、さんざん話し合った結果、「それが武士というものなんじゃないか」という結論に達しました。人を射殺することが日常的に行われていた戦場では、むしろ扇を射ることのほうが異常なのかもしれない、と。

青山 ああ、中学生になるとそこまで考えることができるんですね。

宗我部 私は古典を教えるとき、「同化する体験」と「異化する体験」、その両方を味わわせたいと思っています。例えば、与一が扇を射るときに祈る場面。ここで生徒

城の月」と同じテーマであることに、子どもたちは気づくんです。『平家物語』の冒頭部分は言葉が難解なので、それだけを讀ませて小学生に「無常観」を捉えさせることは難しい。でも、「荒城の月」に触れた後に読ませると、「栄え続けるってことはないんだね」とか「永遠のテーマなのかもしれない」などと、このテーマが、争乱の時代から明治期、そして今にも通じることを何となく感じ取らせることができます。

宗我部 『平家物語』の核心に近づくことができるんですね。

青山 『平家物語』のテーマはこの冒頭部分に集約されています。ですから、小学生だからといって、ただ楽しく音読させるだけでなく、その意味も感じ取らせたいと思っています。さらに「扇の的」など戦いの場面も紹介することで、「この続きをもっと読んでみたい」と感じさせられればと思

「全てわかり尽くせない」からこそ、
おもしろさがどんどん増していく。

(青山)

て、「全てはわかり尽くせないこと」だと思っただけです。小学校、中学校、高校と上がっていくにつれ、わかることが増えて、それまでに学習したこととつながっていく、おもしろさがどんどん増していく。

宗我部 そうやって学び、深めていけるところに、古典が時代を超えて受け継がれるエネルギーのようなものを感じます。

青山 子どもたちが、そのエネルギーを実感することができるのは、ひよっとしたら高校ぐらいなのかもしれない。でも、そこに到達するまで、小学校・中学校で重ねて教えていきたいものです。

